

中國出土資料學會
平成24年度大会（第3回例会）

日時：平成25年3月16日（土）
受付開始 12：30～
研究報告 13：00～17：00
会員総会 17：00～18：00

場所：慶應義塾大学西校舎515教室
（東京都港区三田2丁目15-45）

会場へのアクセス：JR山手線/JR京浜東北線 田町駅下車、徒歩8分
都営地下鉄浅草線/都営地下鉄三田線 三田駅下車、徒歩7分
都営地下鉄大江戸線 赤羽橋駅下車、徒歩8分
<http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html>

報告Ⅰ 橋本 繁（早稲田大学商学部非常勤講師）

発表題目：韓国出土木簡と新羅碑文

発表概要：韓国では近年、新たな木簡の出土が増加している。その年代も紀元前の楽浪郡から13世紀の高麗時代のものまで幅広く、また、呪術に関わるものなど多様な性格の木簡が発見されるようになった。相次ぐ百濟木簡の発見により、古代日本との密接な関係も明らかになっている。本報告では、まず、近年の出土状況について概観する。

その一方で、木簡を活用した研究は、必ずしも盛んとはいえない。その原因は、増加したとはいえ木簡出土点数がまだまだ700点余りにすぎないことと、古代朝鮮に関する文献史料がわずかしがなく、古文書などもほとんど残されていないことにある。こうした中で、比較対照の資料となりうるのが、豊富に残されている新羅の碑文である。咸安・城山山城木簡には、「奴人」など蔚珍鳳坪碑（524年）と同じ用語がみられる。また、近年の発掘成果によって、城山山城木簡が築城に関わるものであることが明らかになり、王京を防禦する山城を築いた際の明活山城碑（551年）・南山新城碑（591年）などとの共通点が想定される。城山山城木簡と同時代の碑文との比較研究を行なう。

報告Ⅱ 范常喜（中山大学講師）

発表題目：従出土文献資料新證鄭玄注古文數則

発表概要：後日 掲載します。

報告Ⅲ 有馬 卓也（広島大学大学院文学文学研究科教授）

発表題目：『淮南萬畢術』の意義—『五十二病方』『醫心方』とのかかわり—

発表概要：『淮南萬畢術』は前漢の文帝期から武帝期にかけて生きた淮南王劉安が、全国から学者や方士たちを招致して制作した著作の一つとされている。しかし、『漢書』芸文志には本書は掲載されておらず、『隋書』経籍志が初出であり、『淮南萬畢経』と『淮南変化術』とが各一卷として子部・五行に記載されている（一番古い記述は『史記』龜策列伝において、増補者の荒少孫が『萬畢』の「石朱方」に言及している部分）。

こういったテキスト上の問題から、本書はこれまでほとんど研究されておらず、傍証資料として使用されることはあっても、専論は楠山春樹氏の「淮南中篇と淮南萬畢」（秋月観暎『道教と宗教文化』（平河出版社、1987）にとどまる。

また内容面から言えば、楠山氏が「その中心をなしているのは同類相感の理にもとづく一種の呪術である」「それは、特別な修行を積んだり、特殊な生活環境の中にある方士の行う術というよりも、むしろ日常生活にも密着して民間に行われていたおまじないの類である」(同上)と述べておられように、科学的なものから、医学・薬学・風習・伝承・禁忌・呪術等にいたるまで、非常に多岐にわたっている。

発表者はこの捉えがたい『淮南萬畢術』を解析する手だてとして馬王堆漢墓出土の『五十二病方』に注目している。本日は『淮南萬畢術』の概要を述べた上で、『五十二病方』との関わり、また古代医学や呪術の様子を今に残す『醫心方』との関わりに言及したい。

☆参加費(資料代)500円

☆非会員の来聴を歓迎します。

☆大会終了の後、懇親会を行う予定です。

ふるってご参加ください。

連絡先(例会委員長)

〒400-0035 山梨県甲府市飯田5-11-1

山梨県立大学国際政策学部 名和研究室

Tel 055-224-5276 (直通) Fax 055-228-6819

E-mail: nawa@yamanashi-ken.ac.jp

